

使はうこは夢にも思ひませんでした
佐野吉之助氏 京城能樂界を評して曰く

和日春小

山下講道館範士の講話

國女子にも柔道の必要なることを説きました。が、滿洲の如きは地の利上自衛といふ點に因つて同地滿鐵社初め守備隊、憲兵、警察有志等團結會合して盛んに武術を練習してゐる。由來柔道は心身を鍛鍊する運動中最も崇拜すべき我國古來の特技であつて諸外列強國と雖も決して其の似の出ない日本獨特の技である。柔道の

は西洋の剛拳家には見出すこととは來ない。

火藥庫事件無根

治火藥庫事件は事實無根の旨、内務省(電報あり)當時の歩調の嚴重取調中なり(大阪特電)

藥庫事件は事實無根の旨知
務省へ電報あり當時の歩
調中なり（大阪特電）

重年この年がの好模範よきまふはん
 故青木堂主人このやうぢやうしゆじんのことと
 堂主人久保田金次郎氏の遺言をに
 午後四時南山本願寺で行おこなはれし

近頃ちかごろの功名こうめいは

の山野雉子ならざるは無^なの
 歩^は郊外に蹈^{たふ}み 出^だ歩^ほ
 最^もも好^{この}く昨^{きの}今^{けふ}秋晴^{あき}れの一日^{いちにち}にか
 ては頃^{ころ}日から十二月にかは

靜肅にして虔虔の誠を捧げ奉り
京畿道長官 檜垣直右氏謹言
大典を如何に奉祝す可きは國民として尤も心得て置く可き點で

と思ふ。就中道では既に此方法に就て考ふる所あり、御大典舉行の
際、内務省私立學校長をして今陛下、御聖徳の一斑及び御大典
の巻となりて歐洲の天地は晴耀輝雨の大盛狀を現出し居れる時
に云ふと云ふは國民として夫々の機關と委員を選びて準備中で
あるが必ず其祝賀の方法は斷慮にして眞に大正、聖天子の御御
念奉らす可き祝賀の會としたいと思ふ。家庭に於ても亦國體
代表を合唱して祝意を表するなり團族又は球燈を吊して御大典を
思ふ。御代々家庭毎に種々な計畫を立て家族に於て永久に此日記念
はないが就中朝鮮に住る吾等内地人が船中の同胞と手を携へ祝
歌を唄ひ衷感を合唱して陛下の御即位を壽き奉ると云ふよ
うな幸願なことであらうか自分は此點に於て特殊の意見を有
しと思ふ。

東京株式特電

[illegible]

Parameter	02.11	02.12	02.01	02.02
Temperature	10.0	10.0	10.0	10.0
Humidity	10.0	10.0	10.0	10.0
Pressure	10.0	10.0	10.0	10.0

大阪三品特電

▲二日前發
 遠東寄付 二三
 日本郵政として

止

止め
11月14日
11月15日
11月16日
11月17日
11月18日
11月19日
11月20日
11月21日
11月22日
11月23日
11月24日
11月25日
11月26日
11月27日
11月28日
11月29日
11月30日
12月1日
12月2日
12月3日
12月4日
12月5日
12月6日
12月7日
12月8日
12月9日
12月10日
12月11日
12月12日
12月13日
12月14日
12月15日
12月16日
12月17日
12月18日
12月19日
12月20日
12月21日
12月22日
12月23日
12月24日
12月25日
12月26日
12月27日
12月28日
12月29日
12月30日
12月31日

品の買入を増加すると
先着を以て減されつゝあ
るの由を尋ねる

天氣

は

十一月三日
二日午後三時
一日午前八時

三十八
日十二

五月 五時三十分

普通

852

満洲五龍背温泉

風光絶佳にして一大楽園地なり
諸病に特効あり理想的療養場なり

七歳迄本人來說
山崎寫眞館
電話六一六番
龍山驛前
社員募集
廿歳より卅五歳迄保
人二名要す
履歴書携帶本人來訪
町二丁目

848 | 849

戸外皮

目下二町

醫 瀨

(二話電)

治町（四ツ角）を東坂上ふらんす
 會前（荒川）二路堂賢活二五五
 ほねつぎ うちみ、くしき治療
 管理者 舊龍山印刷局先畑中
 官吏向 被陽空園南裏

院醫
(目
診察夜九時まで

● 番外 一冊前金六十圓（無割引）
匿名一冊毎に金五圓

京坂本町二丁目
 新荷著
 保稅品有
 水銀
 用山

流謠曲本 一册拾壹錢均一
二册送費二錢

844 番
御大典
最高記念品
に因める

●ほねつぎうちみき等くじき切の治療御依頼に應ず

御勾玉形
衛生口錠

永樂町商品陳列所坂の上
皮膚病 柳病 専門
須古醫院

新
容
器

龍山榮町通廿六番地

819

登匠進
〇七八〇一

匠冊金個

恩給 年金額立替
京城本町二丁目五十三番地

翠色側面は
きんしよくさんらん

電
三番
平
山田牛肉店出

古雅優美
なり

晴れ後曇
十一月二日

九龍
西
○日出 六時五十八分
○月經 五時三十六分
十二時 十二分

三

第三十一窟

[illegible]

暫く御座へ下さい」と手紙を持つて
 忠義の若き宇平活、關根彌次郎の許へ
 飛んで行く、此方は下女の徳、金
 の二人は涙ながらに御新造様の御召
 物や、帯、その他の物を直戴いたし
 御手當の金を戴き、包みに載して之
 を背負つて、自分等の物を捨て置
 した、偖また此方は關根彌次郎門に
 於きましては、來國安の錦刀を懐た
 へ、九十九郎の大手の九十九橋の傍
 へ來て、濕美九郎兵衛、野木左近の
 出て來るのを遇して、鯉口を切り十分
 從信を致して待受ける、彌左衛門今
 年積つて六十四歳、それとは知らず
 御前にてさんゝ轉旋を致し、俊熊
 を押ひ、十分醜態いたしたる野木、
 濕美の兩名、小曲を歌ひながら大手
 九十九橋へ差掛り、待候ながら關根
 彌左衛門大刀キラリと引拔き、彌
 イツ、野木濕美の兩惡人共、側念し
 君の御前で御酒を十分に戴き、眞熊
 立會になつて氣は締まるゝと雖も、
 是金刀醜を發し、足許の亂れる所を
 付け入り斬り込む、其間に濕美九郎兵
 衛、斬り込む一刀、ひつ拂つて「
 イツ」斬り付けると、眞熊腹へ來た
 から、野木所の重傷に血煙たつて打倒
 れる、野木、汝ツと斬り込む、體を
 し突の一本、何條たどりながら、鳩尾の邊
 か、背中を貫かれ、是また血煙たつて
 倒れる二人をそれへ懸し、止めを
 十分に刺し、最早是に此方に於て
 は残り置く事はない、早く冥途へ來
 つて嫁や孫の顔を見ん」と九十九橋
 の欄干に倚り掛り、彌左衛門立腹な
 中と雖も大騒動となり、此事を御成
 府より、直ぐ御使配が下り、それ
 屍骸は遺族の者へ御引渡しに相成
 る、市中の者が、ろく／＼知らぬや

冷え込みは御婦人の
身體に
一番毒なれば
用心は今
靈藥
中將湯
性^{しやう}の婦人^{ふじん}弱^{じやく}き婦人^{ふじん}
ちうじやうたう

召し上り
 恐るべき婦人病を豫防するが
 こうかん



向寒の第一急務なり

定價

二日分	四日分	一週分	二週分	三週分	四週分	五週分	六週分	七週分	八週分	九週分	十週分
二角	四角	七角	一元二角	一元五角	一元八角	二元一角	二元四角	二元七角	三元一角	三元四角	三元七角

●加減あり御
 容贈御申込あれ
 ●加減あり御

[illegible]

祝 酒 奉 用

御 大 御

白 酒

科 種

黒 酒

白 酒

純 正 上 城 酒 造 場

酒 造 場

純 正 上 城 酒 造 場

上 城 酒 造 場

元 賣 發

上 城 酒 造 場

科 種

日 丁 二 町 花 川 仁

番 八 五 七 話 電

番 二 八 八 城 京 發 場

科 種

高田全仲買

週報

入院隨意 普通病室並隔離病室
院長 醫學博士**古城憲治**
尿、便、血液、咯痰等臨床的検査の依頼に應ず（毎日五名を限り無料施療す）

採算時代に入れる期米

米價調節調査會は一般の豫想に反し始めて不要額閉會し漸く懸念重二三の決意を見たとするが此に實行は困難な九三十九の要するに前途尙遠望と見る當期米は又々四十錢内外の再落降の直に見送る常地土迎入る事は今後新穀の出廻り場を終りに推算月限入れる期米は今後新穀の出廻り場を終りに推算月限左右せらるゝいは勿論である今向方萬八千餘石の大組を存せる十二月間は其腰入れ益を深く見れば形勢何に依つては或は意外の破潤を見る哉も疑計後計割を可要と存候

大日本優等酒

品質純良

每津灘御影町

嘉納合名會社

京城市本町四丁目十四番目

前田酒店

電話一三七七

酒櫃口座四二五

白鶴

本廠

京都府

京城市本町四丁目十四番目

電話一三七七

酒櫃口座四二五

資本金 五百萬圓

頭取 安田善三郎

株式會社 仁川米豆取引所仲買人

銀行一般の業務精々御便利に御取扱申候

爲換取組先々内地各方面並朝鮮樞要の地に有之候

★

株式會社 百三十三銀行 京支店

京城市本町壹丁目

電話一五八番 一四九番

振替貯金 京城市一三番

[illegible]